

『源平盛衰記』髑髏尼説話について - 観音巡礼を中心に -

著者	西川 学
雑誌名	奈良教育大学国文 : 研究と教育
巻	24
ページ	33-44
発行年	2001-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10105/10735

『源平盛衰記』 髑髏尼説話について

— 観音巡礼を中心に —

西川 学

はじめに

髑髏尼説話は、異本が八〇種ほどある「平家物語」の中でも、読み本系と呼ばれる『源平盛衰記』（以下『盛衰記』と略す）巻第四十七「北条上洛、平孫を尋ぬ髑髏尼御前の事」、『延慶本 平家物語』（以下『延慶本』と略す）第六本 三十九「経正の北方出家事付身投給事」、『長門本 平家物語』（以下『長門本』と略す）巻第十八「髑髏尼事」と語り本系八坂流諸本の『城一本 平家物語』（以下『城一本』と略す）巻十二「どくろ御前」の四本にしかない、特異な説話である。

先学の論文では、『盛衰記』『延慶本』『長門本』の三本にしかない説話であるとされていたが、筆者の調査から『城一本』にもある

ことがわかり、諸本の比較に『城一本』を加えて考察した。（なお、『城一本』の閲覧を許可下さいました國學院大學図書館のご厚意に対し、この場をお借りしてお礼を申し上げます。）

この説話に関する先行研究は、渡辺貞麿^(一)、砂川博^(二)、柳田洋一郎^(三)、名波弘彰^(四)の各氏に論考がある。いずれも説話の生成と流伝にかかわって論じられている。それによれば、この説話は『長門本』と『延慶本』の間に説話を忠実にダイジェストしたかたちでの広略の異伝が収められ、『盛衰記』はそれよりも後次的成立になる説話を収めているという点で諸氏の見解は一致している。しかし、論考には力点の置き方に差異が認められる。

渡辺貞麿は、宗教社会における融通念仏・勸進聖の生態分析に関心を集中させ、その面から『長門本』と『盛衰記』のあいだの説話の流伝と変容について論じている。

砂川博は、『長門本』の多面的研究の一環として『長門本』の説話に問題を限定し、憫懺尼説話が、「四天王寺に集住した非人法師（念仏比丘尼）」の生成・管理した唱導の話材を採集したものと判定している。

柳田洋一郎は、憫懺尼が憫懺を持つて語るといふ姿勢から「平家物語」の語りの痕跡が残っていると述べている。

名波弘彰は、渡辺の論考を受けながら憫懺尼説話が『長門本』『延慶本』『盛衰記』の順に成立したとする生成論を示した。

四氏とも憫懺尼説話に関する生成論に関して言及しているが、『城一本』を諸本の比較に加えていないことから研究が不十分であったと言える。そこで、筆者は先学の四氏のように諸本の比較や流伝に関して述べるのではなく、『盛衰記』憫懺尼説話の核となる「憫懺を持つて巡礼する人々」という説話内容を中心に考えていきたい。

一 憫懺尼説話

『盛衰記』『城一本』『延慶本』『長門本』の憫懺尼説話に関することを表にまとめると、本論の最後に付した資料のようになる。

（資料1参照）

この表からわかるように、登場する上人（東山長樂寺の阿証坊印

西／大原の湛敬上人）、憫懺尼の出家場所（蓮台野の池坊／大原の來迎院）、若君の供養場所（東山長樂寺／大原の來迎院）、憫懺尼の持ち物（首と小車／首のみ）、若君の父親（平重衡／平経正）、憫懺尼の巡礼のコース（東山長樂寺→奈良東大寺 興福寺→天王寺 西門／大原の來迎院→天王寺）、憫懺尼の往生の遂げ方（断食念仏 ↓木津↓難波の沖↓入水／無言念仏↓渡辺川↓身投げ）、憫懺尼の出自（桜町中納言成範の娘／鳥飼大納言の娘）の観点などから、憫懺尼説話が二系統あることがわかる。

すなわち、それは『盛衰記』『城一本』系と『延慶本』『長門本』系である。前者の憫懺尼説話には、「憫懺尼の巡礼」が書かれていて興味深い。以降は、前者の憫懺尼説話、特に『盛衰記』の憫懺尼説話を中心に考えていきたい。

憫懺尼は、夫重衡が犯した南都焼き討ちの大逆によって、若君を失うという宿命を持っていた。夫を亡くし、我が子を殺された母は、東山長樂寺で印西上人を授戒の師として出家し、夫重衡が犯した南都焼き討ちに対する懺悔滅罪の目的で、南都を巡礼するという運命を背負って南都の地までやって来た。その後、我が身の救済を求め、仏の慈悲を頼って天王寺へ参り、難波の沖で入水往生を遂げた。

これらのことから、憫懺尼は出家して入水するまでに巡礼をしているのである。その巡礼のコースは、東山長樂寺を出発し、南都の

東大寺・興福寺を経て、最後は天王寺へと進んでいることがわかる。

また、憫懺尼が「憫懺の尼」と呼ばれるきっかけともなった南都巡礼中には、この地に「修行者の尼共多くありけれども」と『盛衰記』の本文にも記述されていることから、当時南都の地に多くの尼たちがたむろしていたことがわかる。

そして、長楽寺では印西上人、天王寺では印西の弟子・信阿弥陀仏と関わっていることから、聖との交流もあつたことがわかる。

すなわち、この東山↓南都↓天王寺という巡礼のコースには、尼や聖たちが大きく関わっているのである。

二 観音巡礼と聖

憫懺尼の巡礼のコースの背景には、観音信仰ならびに観音巡礼があつたと考えられるのである。以下に、一つ一つの寺院の観音信仰について見ていく。

長楽寺の観音信仰については、三条実房『愚昧記』仁安三年五月二十一日条に、京洛七観音と呼ばれた「六角堂・行願寺・清水寺・六波羅蜜寺・中山寺・河崎寺・長楽寺・観音寺・得長寿院」(波線筆者)を本尊の観音の名付きで記し、当時参詣者が群をなして参つていたと伝えている。

さらに、同じように京洛七観音の寺院に参詣していたことは、同時代の日記類からもわかっている。これらの日記類から、京洛七観音の信仰は、院政期から始まり、鎌倉・室町時代に至るまで続いていたことがわかる。元来、京洛七観音信仰は、院政期初頭からの朝廷祈禱所としての靈験寺院という性格が強いものであつた。やがて、貴族たちは、観音の靈験や現世利益を慕つて観音参りを始めたものと考えられる。

江戸期に入ると、これらの寺院は洛陽三十三所観音として、さらに庶民に定着した。その定着ぶりは、「洛陽観音めぐり」と呼ばれる京のわらべ歌^五が残っていることからわかる。

六角や誓願寺凶子 下御靈 草堂過ぎて吉田黒谷 長楽寺か
ら巷二ヶ所 清水に五ヶ所 六波羅 さて愛宕寺 大仏や泉浦
寺二ヶ所 今熊野を伏見街道九条へぞ出る 東寺より松西東
蛸葉師 出水 下立売二ヶ所 かい川 東向観音過ぎて天皇寺
清和院にて札ぞ納る (波線筆者)

また、近松門左衛門作『他力本願記』(延宝七年刊)の二段目第三場「玉よの姫道行」の段^六にも、玉よ姫が都三十三所の巡礼に出かける場面がある。

……(前略) さつとこほれてちる雪は むめやさくらの花
かつばみかさながらあげはの 長らくくじ 七くわんおんと聞か

らは七世のねがひたつかゆみ やさかにちかきしやうれうじ：
…（以下略）
（波線筆者）

京のわらべ歌や近松の例からもわかるように、やはり京の観音巡礼には「長楽寺」が外せなかったことがわかる。

次に、南都の興福寺・東大寺と観音信仰の關係についてはどうであらうか。

南都の諸寺の中でも、特に興福寺の南円堂は観音信仰の聖地である。⁷⁰ 現在でも南円堂は、西国三十三所霊場の第九番札所として庶民の信仰を受けているように、観音巡礼の地である。南円堂は、藤原北家の冬嗣が不空羂索観音を安置して創建したもので、藤原氏の繁栄とは切り離せないものであった。その後、貴族たちの観音信仰が庶民にまで広がって、今日の南円堂の観音信仰があるのである。また、東大寺の観音信仰については、二月堂・三月堂を挙げることができる。⁷¹

二月堂は、十一面観音を安置する堂で、「十一面悔過法会」（お水取り）が行われる堂として現在でも有名である。この「十一面悔過法会」（お水取り）とは、本尊の十一面観音の前で行われる懺悔滅罪・除病延命の行法のことである。

三月堂（法華堂）は、不空羂索観音を安置し、毎年三月に「法華会」が行われた。「法華会」とは、『法華経』を講読供養する法会

であり、平安朝からは勅会の法会となった。『法華経』は、女人成仏・悪人成仏が説かれ、懺悔滅罪の經典として当時の人々に重んじられていたことから、法華会も懺悔滅罪の目的で行われていたと考えられる。

よつて、南都の両寺でも観音信仰があり、特に懺悔滅罪の功德を目的としたものであったことがわかる。

最後に天王寺の観音信仰については、『盛衰記』の憍憍尼説話に「年も既に明けければ、救世観音の草創なり、仏法最初の靈地なりとて人に相具して天王寺へぞ参り給ふ。」と記述されているように、天王寺金堂の本尊は、百済から渡来したとされる救世観音であった。院政期には、聖徳太子が救世観音を守本尊としていた伝承や聖徳太子の伝説から、「聖徳太子が救世観音の生まれ代わりである」とされた太子信仰が隆盛であった。⁷² そのため歴代の院や皇族・貴族たちは、こぞつて天王寺に参詣した。その様子は、『台記』や『玉葉』などの日記類からもうかがえる。

また、『梁塵秘抄』には太子礼贊の今様や天王寺礼贊の今様があることから、天王寺への信仰、すなわち「救世観音＝聖徳太子」の信仰が盛んであった。

以上のことから、憍憍尼が巡礼した寺院は、すべて観音信仰の寺院であったと言える。

さらに、建武二年の後醍醐天皇中宮旬子の安産祈祷を記した『御産御祈目録』には、「興福寺南円堂 東大寺法花堂 天王寺金堂」と三寺の名があり、『拾芥抄』に記された三十三所観音には「東大寺法華堂 天王寺 長楽寺」の寺名がある。また、『御修法法文記』嘉元元年閏四月十七日の三十三所観音霊所には、「長楽寺 興福寺南円堂 東大寺法花堂 天王寺金堂」が上げられている。すなわち、彌摩尼の巡礼の寺院と観音巡礼の霊所が重なっているのである。

彌摩尼が立ち寄った東山長楽寺、南都東大寺・興福寺、天王寺は、観音信仰による巡礼寺院との関係があつたのである。また、彌摩尼の巡礼は、観音を持つ慈悲や懺悔滅罪の験力にすぎするための観音巡礼であつたのである。

三 観音信仰と聖、その実態

速水侑の『観音信仰』⁽¹⁰⁾によれば、観音信仰は、鎮護国家的な観音の靈験を期待するところから律令国家に受容されたが、平安時代に入ると、個人の除病・延命・得福などの現世利益のために信仰されるようになり、貴族の観音参詣が盛行し、摂関期には民衆の参詣も次第に増えていった。

院政期には、抖擻聖たちの苦修練行の地であつた観音霊場が、貴

賤の集う結縁の場となり、やがて観音霊場の誕生へとつながるのであつた。すなわち、観音霊場、特に西国三十三所観音霊場の成立には、それらの霊場を巡礼して修行した遊行聖や回国行者・山伏が大きく関わり、民衆の参詣の先達として活躍していたことが明らかになっている。

ゆえに、『梁塵秘抄』⁽¹¹⁾にも

聖の住所はどこどこぞ 箕面よ勝尾よ播磨なる書写の山 出雲の鶴洲や日の御碕 南は熊野の那智とかや

聖の住所はどこどこぞ 大峰葛城石の榎 箕面よ勝尾よ播磨の書写の山 南は熊野の那智新宮とあるように、聖たちは多く諸国の霊山を歴遊して験力を得ていたのである。そして、「山寺行ふ聖こそ 貴きものはあれ……」と今様にうたわれたように、験力を得た聖との結縁を求めて人々がやって来たのであつた。

端的に言えば、聖たちの活躍によつて観音霊場の巡礼が始まり、貴賤の人々に広まっていったと言える。

彌摩尼の巡礼のコースには、聖や尼たちが深く関わっていることを先に述べたが、その理由がここで明らかになった。すなわち、観音霊場において、聖たちは厳しい修行をしつつ、また、先達として民衆を唱導しながら活躍していたのであつた。そのような聖の活躍

が、彌陀尼説話に断片的に取り入れられているのである。

彌陀尼もこれらの観音霊場を巡ること、観音巡礼をすることによつて、夫重衡の懺悔滅罪・若君の成仏・我身の救済を求めていたと考えられるのである。さらに、その巡礼中に、聖や尼たちと交流をしていたと考えられるのである。

ここで改めて「聖」という語に着目しておきたい。五来重は『高野聖』⁽¹⁾で、

原始宗教者としての聖は、隱遁性・苦行性・遊行性・呪術性・世俗性・集団性・勸進性・唱導性をもつものとして歴史にあらわれてくる。

と言っている。また、

高野聖は高野山に所属する聖であるが、高野山のほかにも善光寺・長谷寺・四天王寺・東大寺・鞍馬寺・清涼寺などにも聖がおつてそれぞれの寺の勸進に従事していた。そのほか京都の大原・嵯峨・西山・東山なども聖の住所として知られている。これらの聖はかならずしもそれぞれの寺院に専属したのではなく、たがいに交流したり遊行したりしていたのである。

(傍線筆者)

とある。

すなわち、聖のもつ遊行性によつて東山(長楽寺)・南都(興福

寺・東大寺)・四天王寺(天王寺)という地が、聖たちの活躍・活動していた霊場や修行場としてつながっていたのであった。

『梁塵秘抄』卷二に

尼はかくこそ候へど、大安寺の一万法師も伯父ぞかし、甥もあり、東大寺にも修学して子も持たり、雨気の候へば、ものも着で参りけり

という今様がある。この今様は、尼が聖と同じように、各地を巡礼・遊行しながら修行していたことを伝えたものではないだろうか。

また、このような聖や尼の姿は、彌陀尼が南都巡礼中に、

乞食修行者の様になり果てて、浅ましげにて、行き寄る所を臥どとし、乞ひ得る物に命をつぎて(中略)元来思ひ切りて出

でたれば、栖を定むる事無し。この唐居敷、かしこの築地のはら、木の根、萱の根、いづくにも傾き臥してぞ悲しみける。

とある。

『発心集』第一十「天王寺聖、隱徳の事⁴乞食聖の事」⁽²⁾の

天王寺の聖は、

乞ひ集めたる物をひとつに取り入れて、ありきありき是を食

ふ。(中略)ひたすら物狂ひにてなむありける。指してそこに

跡とめたり、と見ゆる処なし。垣の根・木の下・築地に随ひて

夜を明かす。

とある。

この『盛衰記』の憫憐尼と『発心集』の聖に対する表現はかなり近似しており、当時の聖や尼たちの一般的な生活スタイルを表していると言えるであろう。

すなわち、当時の尼たちの中には、乞食のようにみすばらしい風体でさまよい歩いていた尼がいたのである。憫憐尼も「尼はかくこそ候へど」の今様にあった尼のように、ものも着ない、みすばらしい乞食のような姿であったことが想像できる。

さらに、前出の五来『高野聖』では、

聖のもっとも重要な機能である勸進は、唱導という手段によつてはじめて目的を達することができる。

としている。

『盛衰記』の憫憐尼説話には、尼が我が子を失った悲しさに、

首をば身にそへて放ち給はず。又この若君慰みにとて常に翫び給ひける小車二つを並べ置きて、恋しき時はこれを見てぞ慰み給ひける。

とあり、南都巡礼中に南都の修行者の尼からも

「(前略)五六ばかりなる幼き者の首を懐に入れ持ちて、常は取り出だしていつくしき小車に並べて見る事のきたなさよ。

……(後略)」

と批判され、憎まれる場面が『盛衰記』がある。

この二つの場面は、実は憫憐尼による「憫憐語り」の唱導の実態を示唆しているのではないだろうか。

すなわち、憫憐を使つてその由来を聴衆に語り、勸進していた乞食風な尼がいた可能性が考えられるのである。そして、そのような「憫憐尼」が、観音霊場をテリトリーとして「憫憐語り」の唱導をしていたと考えられるのである。

四 文覚と憫憐、聖のスタイル

聖の要素を持ち、さらに憫憐(偽首)で民衆に勸進していた人物が「平家物語」の中にいる。文覚である。また、文覚は、憫憐・観音信仰ともつながりのある「憫憐聖」でもあった。

「平家物語」では文覚は、諸国の修験道場で修行を積んだ「やいばの験者」である山伏・修験者であり、その間の修行を通じて弘法大師の熱心な信奉者となり高雄の神護寺復興へと尽力した聖であった。

けれども、『盛衰記』に登場する文覚は、修験者や聖としての性格だけではなく、観音信奉者としての描かれ方が強い。

『盛衰記』巻十八「文覚頼朝に謀反を勧むる事」「文覚清水の状、

天神の金の事」「龍神三種の心を守る事」巻十九「文覚発心の事」¹¹¹
東歸婦女の事」「文覚頼朝対面」白首の事」の一連の文覚説話では、

①文覚は、長谷寺の観音の申し子であったこと。

②伊豆流罪の前に、消息文を清水寺の観音に差し出したこと。

③伊豆流罪の道中で、観音利生を役人に語ったこと。

④「若きより千手経（千手観音の利生を説く経）の持者」であったこと。

⑤伊豆への護送中、海上で嵐に遭った際、「我昔より千手経の持者として、深く観音の悲願を憑み、……」と一喝し、災難から逃れたことを観音利生悲願であるとしたこと。

⑥文覚発心の動機が、「この女房（袈婆）は観音。優婆夷の身を現じて、我等が道心を催し給ふと観ずべし」であったこと。

⑦文覚の伊豆配流先が、奈古屋寺であり「本尊は観音大悲の靈像なり。効験無双の薩垂なりければ、國中の貴賤参詣陳なし。」とする観音の寺であったこと。

⑧その奈古屋寺でも、庵を結んで観音の行法を行っていたことから、文覚が観音の信奉者であり、観音に深く帰依していたことがわかる。

そして、このような観音信奉者であった文覚は、慟懐と関係していたのであった。

『平家物語』（覚一本）巻五「福原院宣」で、文覚が伊豆に流された際に、

懷より白い布に包んだる慟懐を一つ取り出す。兵衛佐、「あ
れはいかに」との給へば、「これこそわどのの父、故左馬頭殿
の首よ。平治の後、獄舎の前なる苔の下に埋もれて、後世弔う
人もなかりしを、文覚存ずる旨あつて、獄守にこうて、この十
余年頸に懸け、山々寺々拌み廻り、弔い奉れば（後略）」
と言いながら、頼朝に父・源義朝の慟懐と称する偽慟懐を見せ、平
家打倒の決意を固めさせ、決心させたのである。

このように、慟懐を見せていわれを語るという行為は、勸進・唱
導とつながるものである。

また、『平家物語』（覚一本）巻十二「紺挿之沙汰」では、頼朝
の命を受けた文覚は、

鎌倉の源二位頼朝卿の父、故左馬頭義朝のうるはしきかうべ
とて、高雄の文覚上人頸にかけ、鎌田兵衛が頸をば、弟子が頸
にかけさせて、鎌倉へぞ下られる。

このことは、当時の聖たちの一スタイルとして、慟懐を頸にかけ
て持ち歩いていたということが言えるのではないだろうか。

柳田国男は「毛坊主考」¹¹²で、高野聖が、

近世の記録には、「此輩定まれる資縁無ければ笈を負ひて諸国を托鉢し、無縁の死骨を拾ひ当山（高野山）奥院に回向す」とある〔祠曹雜識四十五〕

（一）内は筆者挿入）
と言っていることから、聖が無縁の死骨を持つて諸国を遊行し、回向していたことがわかる。

まさに、当時の聖たちの多くが、頸から遺骨をかけて遊行していた実態も浮かび上がってくるのである。

さらに言うなら、『盛衰記』卷十九「文覚発心の事」東帰婦女の事」では、文覚が

昔の女（袈裟）の事を思ひ出だして、常は衣の袖をしぼりけり。苦しや慰むとて、かの女の影を写して、本尊と共に頸に懸けて、恋しきにもこれを見、悲しきにもこれを弔ひけるこそせめての事と哀れなれ。（一）内は筆者挿入）

と、女の絵姿をも首に懸けて修行していた様子がわかる。

この場面における恋しい時、悲しい時に絵姿を見て慰めるという行動は、先程述べた憫懷尼の行動と同じである。まさに唱導の実態を表している。

すなわち、聖たちの中には、憫懷・白骨や絵姿を首にかけての異風で聴衆の関心を引き、そのいわれを懺悔する「憫懷聖」がいたのではないだろうか。また、憫懷尼説話で見てきたように、聖だけで

はなく女性の出家者である尼も「憫懷語り」を行っていたのである。そして、そのような「憫懷語り」をする「憫懷聖」や「憫懷尼」たちは、観音信仰や観音霊場に深く関係していたのである。

五来重^{二五}や水原一^{二六}は、文覚と憫懷の関係・聖と憫懷の關係に關して、以前から言及していた。

筆者は、さらに両氏の意見に「憫懷聖」や「憫懷尼」たちが、観音信仰を背景として、観音霊場などで「憫懷語り」の唱導を行っていたことを付け加えたい。

おわりに

『盛衰記』憫懷尼説話に登場する重衡の妻は、愛する若君の憫懷を懷に入れて、南都へ走り、やがて、天王寺にたどり着き、難波の海に消えていった。

この憫懷を持つ女の背後には、おそらく憫懷を持つ複数の尼の集団、すなわち、「憫懷尼」たちの姿を見通すことができるのである。また、「憫懷尼」が、東山（長樂寺）、南都（興福寺・東大寺）、そして天王寺へと浄土に近づいて行ったことが明確に見え、「憫懷尼」の巡礼の道が具体的に見えてくるのである。

その巡礼の道とは、観音を信奉して観音霊場を巡礼し、「憫懷語

り」の唱導をする道でもあった。この憫懷尼説話の観音巡礼は、十二世紀以降に誕生する西国三十三所霊場を象徴的に物語っているのではないだろうか。

一方、『盛衰記』の文覚についても、第四節で詳細に述べたように、憫懷を持った聖であった。文覚も「憫懷聖」を背後に背負いながら、具体的に物語に登場した人物であっただろう。そして、やはり文覚も観音を信仰して、憫懷を持って唱導する聖であったと想定できるのである。

では、なぜ観音信奉者ばかりが、「憫懷語り」をするのであろうか。

そのことに関しては、やはり千手観音が右手に憫懷（杖）を持っているということに由来するのではないだろうか。平安末期の観音信仰は、文覚が信仰していたように千手観音の信仰であった。そして、ほとんどの千手観音は、右手の一つに憫懷や憫懷杖（憫懷に木を突き刺したようなもの）を持っているのである。¹²⁵ この千手観音像が、「憫懷聖」や「憫懷尼」に反映したとも考えられる。

また、文覚を代表とした「憫懷聖」が、首に憫懷や絵像をかけていたことは、現在の西国三十三ヶ所霊場や四国八十八所霊場を巡るお遍路さんが、首から亡き人の遺影や位牌をかけて巡礼することと発想の上では同じであったと言える。

以上、本稿において、一つには、中世における観音信奉者である「憫懷尼」「憫懷聖」の活動を『盛衰記』から推定することができた。二つには、「憫懷尼」の巡礼の道⇨観音巡礼の道も比較的是つきりと見えてきた。

さらに言うなら、憫懷尼が、懐に入れていた若君の憫懷を小車に並べて見ていた、ということから「憫懷尼」の唱導の実態すらさえても、『盛衰記』を読むことによって見えてくるのであった。

以上のごとく、『盛衰記』の背後には、観音信奉者である「憫懷尼」「憫懷聖」の活動が透かし見られ、「憫懷尼」の観音巡礼の道すら象徴的かつ明確に物語っていると書いても良い。また、憫懷を懐から出して泣き明かすことは、「憫懷尼」の唱導の実態を伝えている部分ではないかと思われる。

さらには、憫懷尼説話と文覚説話を通して、『盛衰記』の根底に観音信仰があることがわかった。そして、憫懷尼説話や文覚説話自体を語る「語り手（平家語り）」の存在も考えられ、これらの説話が「平家物語」に取り入れられたことがわかった。

最後に、『盛衰記』において観音巡礼をしている人物がまだ他にもいる。それは、平維盛である。「平家物語」の諸本の中でも、『盛衰記』の維盛だけは、確実に、観音巡礼を行った後、那智の沖で入水往生を遂げているのである。この維盛の観音巡礼、ならびに観音

信仰における入水往生に関しては、後日改めて述べることにする。

【注】

『源平盛衰記』は、水原一考定『新定源平盛衰記』（新人物往来社 一九九二）を使用した。

『平家物語』とだけ記したものに關しては、覺一本系の『平家物語』である新日本古典文学大系本（梶原正昭・山下宏明校注 岩波書店 一九九一・一九九二）を使用した。

また、『平家物語』としたものは、日本古典文学における『平家物語』という軍記物語のジャンルを総称して、本論文では使用している。

(一) 渡辺貞麿『獨體尼説話と洪敬・印西』（『平家物語の思想』法藏館 平成元年）

(二) 砂川 博『獨體尼譚』（『平家物語新考』東京美術出版 昭和五十七年）

(三) 柳田洋一郎『平家物語と死者―首の語りの境界例―』

（『梅花短大國語国文』第四号）

(四) 名波弘彰『『平家物語』獨體尼説話考』

（『文藝言語研究』文藝篇28 筑波大学 文芸・言語学系 一九九五）

(五) 堀井令以知『京ことばとわらべ歌』、京の地名を含むわらべ歌

（平成十二年度日本歌謡学会春季大会公開講演会の発表ならびにレジュメより）

(六) 近松全集刊行会編纂『他方本願記』

（『近松全集』第一三卷所収 岩波書店 一九九二）

(七) 泉谷康夫『日本歴史叢書56 興福寺』（吉川弘文館 平成九年）

(八) 古田紹金・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄監修『仏教大事典』（小学館 一九八八）

「二月堂」「三月堂」の項より

(九) 名畑崇『太子親の展開とその構造』（『日本仏教宗史論集』第一卷 聖徳太子と

飛鳥仏教）所収 吉川弘文館 昭和六十年）

(一〇) 速水侑『増遺書72 観音信仰』（増書房 昭和四十五年）

(一一) 小林芳規 武石彰夫校注『梁塵秘抄』（新日本古典文学大系『梁塵秘抄』岡

吟集 狂言歌謡』岩波書店 一九九三）

(一二) 五来重『角川遺書79 増補』高野聖』（角川書店 昭和五十年）

(一三) 三木紀人校注『発心集』

（『新潮日本古典集成』方丈記 発心集』新潮社 平成二年）

(一四) 柳田国男『毛坊土考』

（『定本柳田国男全集』第九卷所収 筑摩書房 一九六二）

(一五) (一三)の五来に同じ。

(一六) 水原一 卷五「文覧」の頭注 *義朝の獨體

（『新潮日本古典集成』平家物語』中 新潮社 昭和五十五年）

(一七) 佐和隆研 浜田隆責任編集『密教美術大観』第二卷「如来・観音」

（朝日新聞社 昭和五十九年）

（本学大学院生）

